



34



古文4

## 1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

浜島庄兵衛といひしは、享保のころ世に日本左衛門と呼びし大盗なり。この人盗みせし初念は、「不義にして富める者の財物は、盗み取れども咎なき理なれば」<sup>＊1</sup>と心おきてして、その人その家を量りて盗み入りしとぞ。次第に場数をふるまま、盗みの仕方十分手に入り、いかなる所へも入れぬことはなきほどになりたり。それより欲心深くなり、後は義不義の見わけをする暇もなく、都合さへよければ、いづれの所と定めず、盗みに入りけるが、一人も人をあやめたることなかりしとなり。年月を経て、官より厳なる御尋ね者となりける。

一日、庄兵衛、京都の町奉行所に、麻上下を着し両刀を帯して、「御尋ね者の日本左衛門にて候」と、玄関まで出でければ、<sup>＊2</sup>あり合ふ同心・与力の輩立ち騒ぎて、「門を閉させよ、人を集めよ」と、ひしめきければ、庄兵衛のいふやうは、「みづから名のり訴へ出で候もの、」<sup>②</sup>御心静かに「C」といふ。それより縄かけ吟味に及ぶに、その次第を逐一白状していささかも包み隠すことなく、これまで忍び入る所およそ幾十軒、金銀にて得る所幾千、雑物にて得る所若干といふまで、つまびらかに訴へけり。その後「いかなる心より自訴せしや」と問ふに、答へていふ、「それがしは天の網にかかりたれば、とても逃れられぬ身なりと存じ、」<sup>③</sup>Dと申す。さらば「その網とはいかなることや」と問ふに、「御尋ね者も品々候へども、親殺し主殺しの外、人相書にて御尋ねのことは候はず。しかるに近ごろは、それがしこそ大盗よとて、処々にわが人相書を出だして御さがしあるを、辻々にて見候。これを天の網と」E。もはや逃れがたきこと思ひ定め候へば、人に

見出だされんよりは、自訴せんと思ひ定めてかくのごとくに候」と、申せしとぞ。

盗といへども日本左衛門と呼ばれしほどの志はありき。

(松浦静山『甲子夜話』)

＊1心おきてして＝心に決めて。

＊2あり合ふ同心・与力の輩＝居合わせた奉行所の役人たち。

問一 □ A～Eにあてはまる言葉として最も適当なものを次から

選び、それぞれ記号で答えよ。

A 逃げも隠れもいたさず候    I 訴へ出で候

ウ めしとらるべし    E 心得申し候    オ 苦しからず

A    B    C    D    E

問二 — 線①「義不義の見わけをする」と同じような意味を表して

いる言葉を、文中から十字で書き抜け。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

問三 — 線②「の」と同じ働きを次の — 線部から一つ選び、

記号で答えよ。

A 父の大納言は亡くなりて

I 僧の衣に雪降り積もりて

ウ 鬼のひしひしと餅食ひて

E 鬼のやうなるもので来て

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

問四 ―― 線③「天の網」の表す意味として最も適當なものを次から

選び、記号で答えよ。

- ア 人を捕まえるのに使う網。      イ 町奉行所の同心・与力。  
ウ 道德を基準とする天の法。      エ 処々にある人相書。

問五 筆者は、日本左衛門と呼ばれた大盜の話記録しながら、日本

左衛門のどのような点に深い関心を持ったのか。最も適當なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 日本左衛門が自首したとき、礼儀正しく服装をきちんとしていたこと。  
イ 日本左衛門が盗みに入っても人を殺傷しなかったこと。  
ウ 日本左衛門が金持ちの所にしか盗みに入らなかったこと。  
エ 日本左衛門が大盜としての自尊心を持っていたこと。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

寛文元年のことなるに、近江の者三人、丹波の者二人、河内の者一人、以上六人同道にて、湯殿山へあがりける。もとより靈験あらたなる山なれば、いづれも清浄潔肅なり。いづれも、をよそ坂半ばあがるとおぼしき内に、江州の者のうち一人かつて見えず。をのを不思議の思ひをなしける所に、いづくともなく、白き犬一つ来たりて、先立つて行く。いづれも山をめぐるに、この犬もともに離れずして、ひたと付きまといて行く。

さて湯殿山の別当寺に参りて、それより下向しけるにも、かの犬離

れず。いづれも一人見えざることを、いよいよ不思議に思ふ所に、くだんの犬、人の物言ふごとく言ひて、かたがたは一人見えざることを不審し給ふこともつともなり。その見えざるは我なり。はづかしながら語り参らせん。我、親に不孝の罪あり。その意趣は、親、存生の時、さまざまの難儀に逢はすること、たびたびなり。されば、一生の中、一日も安からしめず。よろづに逆らひ、心につひに親と思ふこともなく、ある時は悪口し、いつまでながらへありけるぞ、早く去り給へかしと思ひ、かくのごとくの念慮深くして、その報ひによりて、今はこの山にて、犬となりたり。我が身のことは、身よりいだせる咎なれば、せむかたなし。されども心にかかることは、故郷にありつる妻子の、嘆かむこと不憚に候ふ。我は業力の犬となりて、山に一人とどまるなり。我があとねむごろにとふてくれよと語りてたべ。なごり惜しく候ふと言ひて、黄なる涙をはらはらと流して、なほ山深く入りにける。

いづれもあはれに思ひ、皆、涙をぞ流し。時節とは申しながら、故郷にて犬ともならずして、この山に詣でて犬となりけることこそ不思議なれ。さればこそ清浄堅固の御山へ、不孝無残のともがらが、懺悔の心もなき身として修行するこそもつたいなし。かかるが故に、やがて報ひの犬となさしめ給ふ。あさましき次第ならずや。恐るべし、恐るべし。この話、少しも偽りなきよし。 (『善惡報ばなし』)

\* 1 江州 近江。      \* 2 念慮 思い念ずる心。

\* 3 業力 行為の報い。

問一 文中には会話の部分が一か所ある。その部分の初めと終わりの

五字を書き抜け。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

問二

——線①・②・④の現代語訳として最も適当なものをあとから選び、それぞれ記号で答えよ。

① 不審し給ふ

ア 気がついていらっしゃらない。

イ おもしろいと思います。

ウ ゆるせないことだと思っています。

エ 不思議に思いになる。

② 早く去り給へかし

ア 早く去ってしまいたい。

イ 早く死んでしまわれたらどうしよう。

ウ 早く死んでしまわれたらよいのに。

エ もっと早く死んだらよかったのに。

④ 我があととねむごろにとふてくれよと語りてたべ

ア 私の死後を丁寧(ていねい)に弔(とむ)ってくれと妻子に伝えてください。

イ 私のことをしみじみと妻子に語ってやってくださるまいか。

ウ 私があとに残したおくりものを探して、事情を説明して妻子に与(あた)えてください。

エ 私がねむったようになって、いろいろと声をかけて、さ

みしくないようにして語りかけてください。

問三

——線③「身よりいだせる答なれば、せむかたなし」とほぼ同じ意味の四字熟語を次から選び、記号で答えよ。

ア 以心伝心

イ 言語道断

ウ 自業自得

エ 自画自賛

問四

——□にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア けれ イ けり ウ ける エ けろ

問五 作者は、この話によってどんなことが言いたかったのか。三十

字以内で書け。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

3

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、人のもとに宮仕へしてある生侍ありけり。する事のなきま

まに、清水へ人まねして千日詣を二度したりけり。

その後いくばくもなくして、主のもとにありける同じやうなる侍と

双六を打ちけるが、多く負けて、渡すべき物なかりけるに、いたく責

めければ、思ひわびて、「我、持ちたる物なし。只今貯へたる物とては

清水に二千度参りたる事のみなんある。それを渡さん」といひければ、

傍にて聞く人は、謀るなりと、をこに思ひて笑ひけるを、この勝ちた

る侍、「いとよき事なり。渡さは得ん」といひて、「いな、かくては請

け取らじ。三日して、この由を申して、おのれ渡す由の文書きて、渡

さばこそ請け取らめ」といひければ、「よき事なり」と契りて、その日よ

り精進して、三日といひける日、「さは、いざ清水へ」といひければ、

この負侍、この痴者にあひたると、をかしく思ひて、悦びてつれて参

りにけり。いふままに文書きて、御前にて師の僧呼びて事の由申させ

て、「二千度参りつる事、それがしに双六に打ち入れつ」と書きて取ら

せければ、請け取りつつ悦びて伏し拝みまかり出でにけり。

その後、いく程なくして、この負侍、思ひかけぬ事にて捕へられて  
 人屋に居にけり。取りたる侍は思ひかけぬ便ある妻まうけて、いとよ  
 く徳つきて、司などなりて、頼もしくてぞありける。  
 「目に見えぬものなれど、まことの心を致して請け取りければ、仏、  
 あはれと思しめしたりけるなめり」とぞ人はいひける。

(『宇治拾遺物語』)

20

- \*1 生侍 身分の低い若侍。
- \*2 清水 京都の清水寺。
- \*3 千日詣 神社や寺院に千日(千度)参詣して祈願をこめること。
- \*4 双六 賭け事の一種。
- \*5 思ひわびて 困惑して。
- \*6 精進 酒や肉を断ち、心身を清め慎むこと。
- \*7 痴者 愚か者。
- \*8 御前にて 本尊の観世音菩薩の御前で。
- \*9 それがしに だれそれに。
- \*10 人屋 牢屋。
- \*11 思ひかけぬ便ある妻 世を渡るうえで意外なよい縁故を持った妻。
- \*12 いとよく徳つきて たいそう運に恵まれて。
- \*13 司などなりて 官職を得て。

問一 線①「いたく責めければ、④「をこに思ひて」の現代語訳

として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えよ。

- |                                                                                     |                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| ④<br>エ 調子のいいことを言うやつだと思って。<br>ウ ばかばかしいことだと思って。<br>イ おもしろいことだと思って。<br>ア けしからんことだと思って。 | ①<br>エ 心が痛むほど責め立てたので。<br>ウ 耳が痛いほど責め立てたとしたら。<br>イ ひどく責め立てたので。<br>ア ひどく責め立てたとしたら。 |
|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|

問二 線②「思ひわびて」の主語はだれか。文中から書き抜け。

問三 線③「それ」の指す内容を文中から書き抜け。

問四 線⑤「渡さば得ん」の現代語訳として最も適当なものを次

から選び、記号で答えよ。

- ア 渡すならば受け取ろう。  
 イ 渡そうとしても受け取るまい。  
 ウ 渡せばよいことが得られよう。  
 エ 渡してくればかわりにお礼をしよう。
- 問五 線⑥「悦びてつれて参りにけり」とあるが、なぜ「負侍」は喜んだのか。

問六 「取りたる侍」が、その後幸運に恵まれたのはなぜか。その理由

として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 二千度参りて得られた功德を、誠意を尽くして受け取ったから。  
 イ 目に見えないものでも受け取っておけば、いつかきつと役に立つと確信したから。  
 ウ 「負侍」の言うことを、素直に信じたから。  
 エ 文書を書かせるなど、何事にも慎重であったから。



37



文法3

## 1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私たちのクラスでは、文化祭で、太宰治の有名な小説『走れメロス』を脚本<sup>きほん</sup>にして上演することになりました。<sup>①</sup>ところが、小説の文章をせりふと書きにするのは、予想以上<sup>②</sup>に困難な作業でした。次第<sup>だいだい</sup>にみんなに<sup>③</sup>あせりが生まれ、「ああ、もう間に合わないよ。」<sup>④</sup>と言<sup>い</sup>い出す人も出てきました。そのとき、実行委員の田中君が「<sup>⑤</sup>うまくでき<sup>⑥</sup>5

なくとも、一年に一度しかない文化祭を悔<sup>く</sup>いのないものにしよう。」と呼びかけたのです。<sup>⑧</sup>これがきっかけになって、私たちの気持ち<sup>⑨</sup>が一つになりました。意見を出し合<sup>あ</sup>って脚本が完成すると、配役もすみやかに決まり、その後の練習は順調に進みました。そして文化祭の当日には、全員が協力してりつばな演技を披露<sup>ひろう</sup>することができたのです。幕<sup>まく</sup>10が下りたときに客席から聞こえた大きな拍手は、私たちの心に感動を残しました。

問一 線<sup>①</sup>～線<sup>④</sup>の語のうち、他と品詞が異なるものを一つ選び、

記号で答えよ。また、その品詞名を書け。

問二 線<sup>①</sup>～線<sup>④</sup>の品詞名を書け。

| 記号 | 品詞名 |
|----|-----|
| ①  |     |
| ②  |     |
| ③  |     |
| ④  |     |

## 問三 ( ) にあてはまる副詞を次から一つ選び、記号で答えよ。

ア たとえ イ まるで  
ウ 決して エ たぶん

## 2 次の線部と同じ意味・用法のものをあとの線部から一つ選び、記号で答えよ。

(1) ときどき、頭が痛くなることもある。

ア ある日突然<sup>とつぜん</sup>、「春一番」という風が吹く。

イ 気象用語には、スモッグとかフェーンとかというのがある。

ウ それは新しく登場してきた言葉なのである。

エ 地図は、机の上に置いてある。

(2) きらいなものを、よく食べたね。

ア 彼の作品は、よくも悪くもない。

イ 色の組み合わせが、よくない。

ウ 文章の流れをよくする。

エ そんなことを、よく言えたものだ。

(3) 今日は、人があまり集まらない。

ア あまり遠くへ行つてはいけないよ。

イ この会場には、二百人あまりいる。

ウ 食べ物<sup>①</sup>のあまりは持ち帰ろう。

エ どうしてもこれだけはあまりますね。

- (4) もっともそれを知っているのは彼女<sup>かのじょ</sup>だけではない。  
 ア もっともわたし自身が体験したわけではない。  
 イ 彼の言うことはもっともだ。  
 ウ 君がぼくのことをもっともよく知っている。  
 エ それはもっともな意見だ。  
 彼は、やさしくて親切だ。  
 (5) 彼は、やさしくて親切だ。  
 ア 今月のテーマは、親切だ。  
 イ 親切だけが、大切なことではない。  
 ウ その土地の人たちは、大変親切だ。  
 エ 何よりも大切なのは、親切だ。  
 (6) 君の考えを尊重しよう。  
 ア 考えられる限りの方法を試<sup>ため</sup>してみた。  
 イ 新しい考えを提案する。  
 ウ 考えるよりも行動が先だ。  
 エ 彼は、考え考え話し続けた。  
 (7) 期待にそうようにがんばろう。  
 ア 彼の家は、ここからそう遠くない。  
 イ 妹に付きそうようにして歩く。  
 ウ 急いでそうしてください。  
 エ そう、よかったね。  
 (8) ああ、どうしよう。  
 ア ああしたほうがよかった。  
 イ ああ、ようやくわかった。  
 (9) 暗くなってきた。それに雨も降ってきた。  
 ア 時間もない。それに人手もない。  
 イ わたしの名前もそれに書き加えてください。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

### 3

次の線部は、どこに係るか。記号で答えよ。

- (1) もっとも大切なのは健康だ。

- (2) 彼女は、少しも恐れることがなかった。

- (3) 彼はまるで宝を探す子供のよう<sup>エ</sup>に、蝶<sup>ちよう</sup>を待ちぶせていた。

- (4) 彼は、りっぱに仕事をやりとげた。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

### 4

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私の家の庭には一本の桜の木がある。毎年淡い色あいの花を満開にして、家族の心をなごませてくれる。小さいころはそうでもなかったが、いつのまにか、美しく思えるようになったのは不思議な気がする。散った花びらが庭をいろどるのも、清少納言ではないが、たいそう趣がある。

問一 文中から形容詞の連用形を二つ書き抜け。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

問二 文中から形容動詞を一つ書き抜け。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

問三 線部「散つ」の活用形を書け。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_



## 5

次の——線部の中から助動詞を二つ選び、番号で答えよ。

- (1) 彼は、それほど背が高くない。  
 (2) しかたないので、歩いて行つた。  
 (3) そんなに遠くへは、行かない。  
 (4) 食欲がないのか、食べたがらない。  
 (5) まったく、とんでもない話だ。

\_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

## 6

次の——線部の語のうち、意味・用法が他と異なるものを一つずつ選び、記号で答えよ。

- (1) ア 自分の名前を呼ばれる。  
 イ 故郷のことが思い出される。  
 ウ 重い荷物を持たされる。  
 エ リレーの選手に選ばれる。  
 ア 今にも雨が降りそうだ。  
 イ もう少しで花が咲きそうだ。  
 ウ 彼女は留学するそうだ。  
 エ 日曜日は美術館が混みそうだ。  
 ア 彼は正直な人らしい。  
 イ 木の陰にいるのは小鳥らしい。  
 ウ 彼女の服装は高校生らしい。  
 エ どうやら列車は遅れるらしい。  
 ア 厚い本を読んだ。  
 イ 胃が悪いのでよくかんだ。  
 ウ 大阪まで飛行機で飛んだ。  
 エ あれは、父のかばんだ。

\_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

## 7

次の——線部の語の説明として最も適当なものをあとから選び、記号で答えよ。

- (5) ア この本を君にあげよう。  
 イ テレビでも見ようかな。  
 ウ 僕にもあれくらいはできよう。  
 エ 他人には親切にしようと思う。  
 (6) ア 重い心を引きずっているような口調だった。  
 イ 兄のような立派な技術者になりたい。  
 ウ 背中を触られたような軽いショック。  
 エ 宙に浮いているような気分だ。  
 (3) 彼女の歌声は小鳥のさえずりのようだ。  
 (4) あんなまじめな人間は、めったにいない。  
 (5) 先のとがった靴をはく。  
 (6) 太陽に照りつけられた砂浜は、歩くと足が痛かった。  
 (1) 疲れていたので、すぐに寝ようと思った。  
 (2) カメは、百年ぐらひは生きるそうだ。  
 ア 存続の助動詞。  
 ウ 意志の助動詞。  
 オ 比喩の助動詞。  
 イ 過去の助動詞。  
 エ 否定の助動詞。  
 カ 伝聞の助動詞。

\_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

8 次の——線部の中から助詞を一つ選び、番号で答えよ。また、その種類も書け。

- (1) 生きていく上において大切なことだ。  
 (2) 彼は不思議にも、けが一つなかった。  
 (3) 彼女は、子どものように喜んだ。  
 (4) 映画はすでに終わっていた。

番号

種類

9 次の——線部と同じ意味・用法のものを下の——線部から一つずつ選び、記号で答えよ。

- (1) 山のふもとに住む。

ア 海に見える公園。  
 イ 私の書いた文章。  
 ウ 雪の残る山道。  
 エ 小鳥のさえずりが聞こえる。

- (2) 実験で証明する。

ア 写真で様子が分かった。  
 イ 午前中で仕事が片付いた。  
 ウ 大雨で交通が混乱している。  
 エ 講演が体育館で行われる。

- (3) 行くか行かないか。

ア 明日の天気はどうなるか心配だ。  
 イ それを貸してくれませんか。  
 ウ 自信があるせいかな落ち着いている。  
 エ 煮るか焼くかしてください。

- (4) 春になると花が咲く。

ア 山が紅葉したと彼が教えた。  
 イ 私も我もと見物に来る。  
 ウ 寒くなると庭の池に氷が張る。  
 エ 仲のよい友人とよく遊ぶ。

- (5) 近いからすぐ行ける。

ア 東京から大阪まで行く。  
 イ 暑いから食欲がない。  
 ウ 今日からマラソンを始める。  
 エ 旅行から帰ったところだ。

10 次の——線部の副助詞の意味を下から選び、記号で答えよ。

- (1) あなただけに話す。  
 (2) 海も山も人でいっぱいだ。  
 (3) 鉛筆などの筆記用具はありますか。  
 (4) 彼こそこの仕事にふさわしい人だ。

ア 例示  
 イ 強調  
 ウ 限定  
 エ 並立

11 次の——線部の助詞の働きを下から選び、記号で答えよ。

- (1) 横断歩道を渡りましょう。  
 (2) 竹やぶのある所へ来た。  
 (3) 氷が解けて水になった。

ア 結果を示す。  
 イ 帰着する場所を示す。  
 ウ 経過する場所を示す。